調査報告

職能武家集団の移住にみる千町野開発の意義と実態
Significance and Reality of the Shogunate Retainers' Migration as Technocrats
in the Development of Senchono

夏目 宗幸・安岡 達仁
NATSUME Muneyuki and YASUOKA Michihito

(2020年4月17日受付 2020年5月25日受理)

千町野開発は、武蔵野台地における初期新田開発の一例であることから、地理学上の新田開発研究のモデルケースとして、これまで種々の学説が提唱されてきた。それらの研究は、対象地の計画地割や土地利用、土地生産力、あるいは土豪名主の役割規定などの視点から千町野開発の実態を把握しようと試みているが、幕府の具体的関与の実態について言及していない。本研究はこの点に着目し、千町野開発におけるその実態を明らかにするために、千町野に移住した武家集団の詳細な来歴を調査した。その結果、千町野に移住した武家集団は、三つの職能集団すなわち、1) 代官・代官手代の集団、2) 鷹狩・鷹場管理を専門とする集団、3) 測量・普請を専門とする集団に分類できることが明らかとなった。これにより千町野開発は、幕府技術官僚としての職能武家集団の関与によって遂行されてきたと結論付けた。

Various theories have been proposed as model cases for geographic research on new field development. The Senchono development is one of the early examples of new field development in the Musashino upland. Studies have attempted to understand the Senchono development from the perspective of planned land allocation, land use, land productivity, and the role of feudal landlords. However, they did not mention the actual involvement of the shogunate in the development. In this study, we investigated the detailed history of the shogunate retainers who migrated to Senchono to clarify the actual participation of the shogunate. The results showed that the main actors can be classified into three functional groups: 1) the governor and agents; 2) experts in surveying and construction; and 3) experts in falconry and falconry field management. Based on these results, we conclude that the Senchono development was carried out with the explicit involvement of shogunate technocrats' migration.

キーワード: 武家地, 新田開発, 武蔵野, 幕領, 寛文期

Keywords: Shogunate retainers' land, new field development, Musashino, shogun's demesne, Kanbun period

I はじめに

地理学における基本的関心事の一つは、エクメーネ(移住限界)の拡大現象である。歴史地理学は、大幅な耕地と集落の増加によって、日本列島の地理空間に重大な変化をもたらした近世の新田開発に注目し、貴重な研究成果を積み重ねてきた(菊地 1958, 1977, 1986; 内田 1971; 喜多村 1981; 福田 1986)。新田開発による土地利用の変化は、近世における最も重要な地理的特徴の一つといえる(Komeie 2010)。他方、新田開発の歴史的展開は、歴史学においても注目され、「小農民自立」体制構築の原動力として、近世社会に重要な変化を惹起したことに焦点付けた研究成果を蓄積してきた(木村・伊藤 1960; 木村 1964; 大石 1968)。

千町野¹⁾の開発は、こうした近世新田開発の代表的1事例として挙げることができる。千町野は、武蔵野台地の南部地域、現在の東京都武蔵野市、三鷹市北部、杉並区西部に跨る地域である(図1)。その開発は、万治2(1659)年の江戸市中の住人の移住によって始まり、その後、寛文4(1664)年に吉祥寺新田、西窪新田、連雀新田が開かれた。さらに寛文12(1672)年に再び検地が行われ、大宮前新田、連雀前新田、関前新田が村立している。その後も断続的に残りの土地の開発が進められ、享保年間までには全域の開発が完了した(武蔵野市史編纂委員会 1965)。

これまでの研究においては、千町野に成立した村々は、「日本開墾史上の一大標本」(高橋 1929)とされ、近世初期の江戸幕府の構想した自給自足可能な新田開

図1 寛文年間の千町野開発
(農研機構農業環境変動研究センター公開の第一軍管区地方2万分1迅速測図原図に加筆修正)

発のモデルケースであるとして議論されてきた(内田 1934, 1935; 菊地 1957, 1986)。

そうした議論の第1の根拠は、均分主義的計画地割にある。武蔵野台地には、計画的に区画されたいわゆる短冊状地割の新田が数多く分布する。それらの中においても、千町野に展開した地割の均一性の高さは特筆に値する。高橋(1929: 234)は、千町野における開発形態を「札野新田地割模型」として図示し、次のように述べている。「此札野新田は、一切平等主義によって土地を均等に各百姓に分與された。若し人間の性情が理想の如く平等を維持して行かれるものであれば、この處は永劫の極樂郷であつたのである」。

菊地(1958)は、この計画地割に関して、各名請人とその家族が自給自足を可能とするように設計されているとし、近世前期の伊奈家を代表とする関東流地方役人に設計された理想的村落の建設ととらえていた。関東ローム層に覆われた貧弱な土壌環境における耕作は困難を極めたが、耕作地の土壌改良のための堆肥生産に欠かせない雑木林や草場の土地の年貢率を低く抑えたり、無課税地として検地を留保するなど、土地の生産力と百姓の生活とのバランスに十分な配慮がなされていた(内田 1971; 菊地 1977)。

議論の第2の根拠は、江戸市中との密接不可分の地理的關係性にある。千町野は、江戸市中に近接した地理的条件にありながらも、代官支配地域内であり、加えて広大な未開発地であったことから、幕府中枢における政策方針が直に反映された(菊地 1977)。前述の通り、開発の嚆矢は万治2(1659)年に江戸市中の住人の移住にあり、寛文4(1664)年や寛文12(1672)年に成立した村々の名請人の中にも江戸市中に出自を持つ者も多く存在し(武蔵野市史編纂委員会 1965)、その地割には、江戸の町割と共通の丈量法を用いた可能性も指摘される(夏目 2020)など、江戸市中との関係性の密接な地域といえる。

上に示した二つの根拠で明らかのように、千町野の新田開発は、その計画的地割構造において江戸市中と密接な関係性を有しており、そのため、幕府の設計思想を色濃く反映し、ほとんど自明のものとして幕府直轄新田と考えられてきたと推論できる。

しかしながら、こうした推論を裏付ける当該地域の地方文書の記録は少ない。開発士豪名主として開発に尽力した井口八郎右衛門と、幕府方として開発を指揮した勘定方の妻木重直や代官の野村爲利とのわずかなやり取りの記録が、武蔵野市関前の井口家文書²⁾とし

て残されているのみである。そのため、幕府による千町野開発に対する具体的関与の実態は明らかとはいえず、地理学において展開されてきた新田開発のモデルケースとする諸説についての裏付けも十分とはいえない。

本研究においては、これまでの研究が対象地の計画地割や土地利用、土地生産力、または土豪名主の役割などを通して、千町野開発の実態を把握しようと試みてきたのに対し、開発に伴って千町野に移住した武家集団の来歴に注目して論を展開しようと試みるものである。

前述の井口家文書には、千町野開発に伴い、寛文10（1670）年に行われた土地割渡しの際の名請人の中に、多数の武家の名前が存在している。これらの武家集団の人物像に迫ることで、彼らの共通点を抽出し、千町野開発の実態を明らかにする。

II 研究対象史料

本研究において、中心的に用いる史料は、寛文10（1670）年6月の「御札野新田村と方とへ相渡し申覚帳」（武蔵野市立ふるさと歴史館所蔵、以下、「覚帳」）である³⁾。これは武蔵野市関前の井口家に伝来した横帳であり、土地の割渡し区分を記載している。その構成は、「大宮前渡ル覚」、「無礼前渡ル覚」、「れんちゃく新田前渡ル覚」、「関前渡ル覚」と章立てされており、位置として連続していない4地区における土地を割渡される人物名を記載している。なお札野という地名は、千町野全体もしくは、一部が、幕府御用の萱場であったことから名付けられた地名である。無礼という地名は、千町野に隣接する牟礼村の牟礼に別字を当てたものである。ここにいう4地区とは、後に村立した大宮新田、連雀前新田、関前新田の3地区と、牟礼村西端に位置する連雀前新田の飛地地区の4地区を意味する。「覚帳」における「大宮前渡ル覚」は大宮前新田、「れんちゃく新田前渡ル覚」は連雀前新田、「関前渡ル覚」は関前新田、「無礼前渡ル覚」は軒数から牟礼村の西端に成立する連雀前新田の飛地部分をそれぞれ指していると考えられる。

「覚帳」を作成した人物は不明である。ただし、代官を「御代官」と呼称しており、苗字を持つ武家と思

われる人物達に対しては「様」、「殿」の敬称をつけている一方、周辺農村から集まった百姓身分の人物には、敬称を一切つけていないことから、文書が保管されていた名主家の井口家によって作成された文書であることを推測できる。

「覚帳」は、千町野開発の経緯を知る重要な手掛かりであるため、武蔵野市史や、杉並区史に解説されている。しかし、史料上の制限から、開発土豪名主として、開発に協力した井口家の役割を中心とした記述が多く、開発に関与した武家達に関する分析は少ない。また武蔵野市史、杉並区史は共に、当該市区内に含まれない地区に関する解説は省略するなど、自治体史編纂の枠組みに阻まれて、包括的検討がなされなかった史料の一つといえる（武蔵野市史編纂委員会 1965; 杉並区教育委員会 1975; 東京都杉並区役所 1982）。

武家の来歴を調べる史料としては、幕府の直臣に関する『寛政重修諸家譜』（以下、『寛政譜』）のほか、『御家人分限帳』、『断家譜』の刊本を新たに用いた。また、地方文書としては、武蔵国豊島郡角筈村の名主渡辺伝右衛門家に伝来した文書集、渡辺家文書（慶応大学文学部古文書室所蔵）の一部を参照する。渡辺家文書は、全3,443点の文書群である。文書群における史料数のピークが、元禄期から享保期にあるという特色を有し、近世中期の江戸近郊農村の動向を知る重要な史料群である（大石 1992）。渡辺家が名主を務めた角筈村の大部分は、近世期を通じて幕府代官支配（幕領）地であった。正保4（1647）年に野村爲重が代官に就任して以来、野村爲利、野村爲政と世襲し、天和元（1681）年まで、3代（3名とも野村彦太夫を名乗る）にわたって野村家が代官を務めた。和泉（2011）によれば、正保年間の武蔵の幕領は48万石余りで、そのうち関東郡代伊奈判十郎忠治が27万石余りを領していた。野村爲重はこの段階で2万7100石を代官として支配しており、伊奈以下20名の代官と3人の総町年寄が幕領を分割支配していた。野村家は、千町野を支配した代官でもあり、角筈村と千町野は、同じ代官の支配下にある地域であった。本研究においては、渡辺家文書のうち、IIIの1で詳述する4点の証文史料を参照する。

III 結果・考察

本研究の結果、千町野に屋敷を構えた武家のうち、比定された人物達は、その本人の来歴と家柄から、1) 代官と代官手代の集団、2) 鷹狩・鷹場管理を専門とする集団、3) 測量・普請を専門とする集団の三つに分類される人々であることが分かった。

表1は、「覚帳」に名前記載された人物のうち、武家の可能性のある46名の名前と来歴である。「様」、「殿」の敬称が付された人物以外にも、苗字を有する人物や、受領名を有する人物も含んでいる。ただし、近世初期においては、武家階級以外の人々も苗字や受領名を有する例が多くみられるため、必ずしも全員が武家階級であるわけではない。

『寛政譜』、『断家譜』、『御家人分限帳』、渡辺家文書等の史料から明確に比定された人物は21名であった。そのほかにも、有力候補と思われる3名の人物も存在するが明確に比定できない。また、残りの22名は不明である。

来歴が明らかになった人物に共通する事柄としては、御目見以上の高い地位にある人物であっても、三河以来の譜代出身者がいないことである。また、文禄・慶長期においては、関東支配を盤石にするために、武田家旧臣や北条家旧臣の家系を積極的に関東各地の代官職に登用する例がみられるが（村上 1965）、「大宮前」に移住した武家は、必ずしも武田家旧臣や北条家旧臣の家系に偏っておらず、幅広い地域の出身者である。以下、こうした人物達の属性について詳述する。

1. 代官と代官手代の集団

「札野」の開発は、関村の（井口）八郎右衛門、その子杢右衛門、喜兵衛、高井戸の九郎兵衛が請負人となり、寛文10年2月、代官野村爲利（彦太夫）宛、「高井戸札野新田開発請負状」（武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館所蔵）を提出した時から本格的に始まった（武蔵野市史編纂委員会 1965）。

「大宮前」と「れんちゃく新田前」の土地の約半分程度は、武家地として割り振られている一方、「無礼前」と「関前」にはほとんど武家地の割付はなく、「札野」の土地配分は、武家地とそれ以外の2形態に

分類できる（武蔵野市史編纂委員会 1965）。特筆すべきは、「大宮前」には代官野村の配下として、「御代官上下共二拾人分」と記され、10筆の屋敷割がなされていることである。後述する「れんちゃく新田前」に屋敷を有する代官手代とは異なり、各人の氏名は記されていないため、10筆の土地をどのように分配したのかは判然としない。ただし、「御代官」と記載のあることを考えれば、普段は江戸に在府する代官の出張所のような施設があった可能性も考えられる。そうだとすれば、代官による「札野」一帯の支配の中核であったと推定することも可能である。

後述する書院番遠山忠三郎景光、さらには代官野村の上司で、全国の幕領支配を管轄する勘定奉行妻木重直など、「札野」開発の中心的人物が多数確認されることも、こうした推論の成り立つ可能性を補強している。

次に、「れんちゃく新田前」に土地を保有していた幾人かを特に取り上げ、その属性を検討する。「れんちゃく新田前」には、「一同 三つ 馬場勘右衛門殿 青柳武兵衛殿 千賀三左衛門殿 高橋清□殿 鈴木平左衛門殿 平田作右衛門殿」との記載があり、3筆の屋敷地を馬場以下の6人で分有、つまり単純計算すれば1人当たり1/2筆の屋敷地を、各人に割当てられたことが分かる。以下、複数の資料に基づき、屋敷地を与えられた6人の人物像を探る。

「関前」の東隣に位置する西窪新田の村立した際に作られた、寛文4（1664）年7月の検地帳「武州多摩郡西久保村辰之御縄水帳」（武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館所蔵）によれば、「野村彦太夫代」の鈴木久兵衛、井田猪右衛門の2名と共に、手代の下で実測を担う「竿取⁴⁾」として馬場甚右衛門・長谷川又兵衛の名が記載されている。また、「関前」が関前新田として村立した際に作成された、寛文12（1672）年5月の検地帳「武州多摩郡関村前札野新田検地水帳」（武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館所蔵）には、「野村彦太夫代」として平田作右衛門・千賀三右衛門・高橋甚右衛門・梅村伝左衛門の名を確認できる。

さらに、前述の渡辺家文書のうちの4点の証文史料を紹介したい。代官手代が小検見⁵⁾に赴いた際に扶持米を受け取ったことの証文綴「（寛文8年より天和3年迄扶持米請取手形綴）、13点綴」（史料番号F666）に

表1 「覚帳」武家一覧

大宮前渡ル覚

職能	筆数	土地所有者	敬称	確認状況	寛政譜名	寛政譜別名	御家人分限帳名	備考
I	10	御代官上下共二拾人分		○	野村爲利	庄之助, 藤左衛門, 彦太夫	野村彦太夫	京極・浅井旧臣家。祖父の爲勝は、元和6年に鳥見同心を預けられる。万治2年9月21日に父で代官の爲重が死去。万治2年12月25日に代官就任(幸禮野移住の間、代官職が空白状態である。厳有院拝読は明暦3年7月26日のため、代官就任時点でかなり若年の可能性あり)。延宝元年に家督を息子の爲正16歳に引き継ぐ(『寛政譜』)。
II	2	遠山忠三郎	様	○	遠山景光	景恒, 忠三郎, 十兵衛		土岐・斎藤旧臣家。父景重も忠三郎であるが、寛文9年に死去。父景重は、正保元年12月12日と慶安2年12月20日に酒井忠勝の鷹場に派遣されている(『酒井家編年史料稿本』)。鳳来寺普請を行い、牟礼野の大砲試験にも加わる(『史料稿本、視聽日録』)。息子景秀も忠三郎だが、寛文12年の御目見のため、別人物である。妻は永井直元の娘。後妻は今村正長の娘。また妻木頼保の娘も娶る。上総国殖生、山邊に900石(『寛政譜』)。
III	3	妻木彦右衛門	様	○	妻木重直	傳兵衛, 彦右衛門, 頼熊, 致仕 號暫軒	妻木彦右衛門	土岐・斎藤旧臣家。寛文9年新堀地巡見では、金丸, 設楽, 平野, 伊奈, 妻木は、岡田, 松浦, 杉浦宛の書状を送っている(『蠹餘一得』)。寛文2年3,000石。「(寛文)九年六月十四日上總(ママ)國笠掛野, 下野(ママ)國椿海, 及び武蔵野等にいたりて、新田となすべき地を檢す」。天和3年に80歳で没。娘は遠山景光の妻。妻は、真田安房守昌幸の女子(『寛政譜』)。妻の名前は清光院(『人物叢書 真田昌幸』)。
IV	2	久保五兵衛	様	○	久保正信	求之助, 五兵衛, 吉右衛門, 正永		山名・北条旧臣家。父の久保正元と同じく諸家領地と寺社領地の御朱印の書記を務める。叔母は夏目甚五左衛門の妻。天和3年6月21日禄没収(『寛政譜』)。
III	2	山田七兵衛	様	○	山田直國	虎之助, 七兵衛		伊賀衆・北条旧臣家。「(寛文)九年八月十七日仰をいたまはりて、上野、信濃、越後等を巡見す」。慶米150俵(『寛政譜』)。
III	2	平野二郎□□	様	○	平野勝長	次郎助, 次郎左衛門, 呈譜 勝安	平野次郎左衛門	里見旧臣家。寛文9年新堀地巡見では、金丸, 設楽, 平野, 伊奈, 妻木は、岡田, 松浦, 杉浦宛の書状を送る(『蠹餘一得』)。「寛文六年七月六日さきに禁裏の事をうけたまはり、京師におもむきしにより、時服二領黄金二枚をたまふ。...延宝二年十一月十六日さきに禁裡及び御所方の普請をうけたまはるの處、精勵せるよきこしめされ、黄金五枚をたまひ、落成のち禁裏よりも歌仙和歌及び色紙等を恩賜あり。五年五月十五日江戸にをいても時服二領黄金三枚をたまふ」。当時、慶米150俵(『寛政譜』)。
III	2	野瀬武左衛門	様	○	能勢頼次	武左衛門	能勢武左衛門	豊臣旧臣家。「寛文六年常陸國谷原にをいて新堀の田を發く...」。祖父頼安は、「さきに所所の論地を檢せし」。子の頼實(よりさね)は、「武蔵國堤川除の所々を檢視す」。当時250俵(遺跡の際に返還)、後遺跡の500俵と、加増で600石(『寛政譜』)。息子、兵左衛門は、佐山房野の息子の行房と、飯田正吉の息子の長清9番飯田惣左衛門組にて同組(『御家人分限帳』)。
III	1	まつら伊右衛門	様	○	松浦信貞	左近, 八左衛門, 猪右衛門, 致仕號道秀		平戸松浦分家。寛文9年新堀地巡見では、金丸, 設楽, 平野, 伊奈, 妻木は、岡田, 松浦, 杉浦宛の書状を送っている(『蠹餘一得』)。「(寛文)五年五月初日(さくじつ:一日)おほせをうけたまはり、畿内の川口を檢視す」。当時、3,000石(『寛政譜』)。
I		与右衛門	殿	×				
I		小山太郎左衛門	様	×				
III	2	斉藤二郎右衛門	様	○	斉藤利安	萬九郎, 次郎右衛門	斉藤二郎右衛門	上杉・織田旧臣家。「明暦三年三月十九日さきに假橋普請の奉行をつとめしにより時服二両をたまふ。...天龍川堤の普請を監す。」娘は、桜井清右衛門の息子喜兵衛義明の妻。当時1,500石(『寛政譜』)。子の利常は、御鉄砲頭で田付四郎兵衛と同組(『御家人分限帳』)。
I		福田勘兵衛	様	×				
III	1	朝比奈彦右衛門	様	○	朝比奈眞辰	眞之, 長吉, 十兵衛, 彦右衛門		今川・武田旧臣家。「万治二年正月七日より本城普請のうち假の石奉行をつとめ...」貞享2年71歳で死去。400石。叔母は能勢氏妻。妹は、興津伊左衛門良重の妻。女子は野村彦太夫篤政の妻。息子朝比奈眞寅は、相模国の采地のうち新堀地を合せ、470石(『寛政譜』)。
II	1	佐山角左衛門	様	○	佐山房野	角左衛門		家系出自不詳。鳥見役組頭。子の行房は150石。9番飯田惣左衛門組で飯田正吉の息子の長清、能勢頼次の男子の兵左衛門と同組(『御家人分限帳』)。
II	1	宿屋武兵衛	様	○	宿谷尹宅(『断家譜』)	武兵衛(『断家譜』)		家系出自不詳。鳥見役。武州生まれ。宿谷太郎右衛門道重3男(『断家譜』)。養子の宿谷善太夫は、れんちやく新田前の余語堅壽の孫の瑞頭と同じ養仙院の御用達であり、名前は武太夫(『御家人分限帳』)。
I		近藤与右衛門	様	△			近藤与右衛門	7人扶持(『御家人分限帳』)。他家と比べて家格が低く別人物の可能性あり。
II	1	飯田又右衛門	様	○	飯田正吉	又右衛門	飯田又右衛門	家系出自不詳。鳥見役『寛政譜』。息子の長清は150俵。9番飯田惣左衛門組で能勢頼次の息子の兵左衛門と、佐山房野の男子の行房と同組(『御家人分限帳』)。
III	1	金丸又三郎	様	○	金丸重正(『蠹餘一得』)	某, 又三郎, 又左衛門		武田旧臣家。寛文9年新堀地巡見では、金丸, 設楽, 平野, 伊奈, 妻木は、岡田, 松浦, 杉浦宛の書状を送っている(『蠹餘一得』)。「寛文四年三月二十九日御勘定に列し、九年六月十四日上野國笠掛野をよび下総國椿海武蔵野等におもむき、新堀すべき地を檢し、のちおほせをうけたまはりて、畿内の御料所を巡見す。また淀川の普請をうけたまはりて、彼地におもむきしにより、地服黄金等をたまふ」父、重久は小普請。石高は重久の代で150俵(『寛政譜』)。息子四郎兵衛も150俵(『御家人分限帳』)。延寶5年2月19日、勘定役下島政重とともに上方代官所巡察(『史料稿本、延寶日記』)。
I		清水文左衛門	様	×				
IV	1	桜井清右衛門	様	○	櫻井信義	信昌, 市十郎, 清右衛門		武田旧臣家。息子の義明の妻は、斉藤次郎右衛門利安の女子。信康は、祖父信義の遺跡を継ぎ(『寛政譜』)、300石(『御家人分限帳』)。
	2	金藤猪右衛門	様	×				

I	代官・代官手代
II	鷹狩・鷹場管理
III	測量・普請
IV	その他

表1 「覚帳」武家一覧(続き)

無礼前渡ル覚								
職能	筆数	土地所有者	敬称	確認 状況	寛政譜名	寛政譜別名	御家人分限帳名	備考
	2	兵庫		×				
れんちやく新田前渡ル覚								
職能	筆数	土地所有者	敬称	確認 状況	寛政譜名	寛政譜別名	御家人分限帳名	備考
	1	佐々勘右衛門	殿	×				
	2	次郎右衛門	殿	×				
	2	次平	殿	×				
	2	伝兵衛	殿	×				
	2	六九郎左衛門	殿	×				
	1	鈴木七郎左衛門	殿	×				
	1	福田庄左衛門	殿	×				
	1	梓野小左衛門	様	×				
Ⅳ	1	与後古庵	様	○	余語堅壽	以雪、 古庵、 法眼	余語古庵	織田旧臣系。寛文12年に番醫となる。父常壽は小兒の醫（『寛政譜』）。古庵（同名）は1704年時点で41歳であり、その祖父が比定される。孫の瑞碩は、養仙院様附御用達50石20人扶持武蔵（『御家人分限帳』）。
	1	小和泉伝右衛門	様	×				
Ⅲ	1	古田吉左衛門	様	○	吉田重弘	平三郎、 吉左衛門、 重昌	古田吉左衛門	土岐・斎藤・豊臣旧臣系。父重忠は、大阪の陣で豊臣方となり、戦死。叔父重治に育てられる。重治は美濃生まれ、各地で城普請を行っていた（『寛政譜』）。500石（『断家譜』、『御家人分限帳』）。
	1	伊田佐兵衛	殿	×				
	1	山本一郎兵衛	殿	×				
	1	松本久太夫	殿	×				
	1	鈴木勘左衛門	殿	×				
	1	石川六郎左衛門	殿	×				
	1	坂下善兵衛	殿	×				
Ⅰ	3	馬場勘右衛門	殿	○				代官手代（証文①、証文②）。「武州多摩郡西窪村辰之御縄水帳」のほか、「武州多摩郡吉祥寺村辰御縄水帳」、「武州多摩郡連雀村辰御縄水帳」にて竿取。
		青柳武兵衛	殿	○				代官手代（証文③）。
		千賀三左衛門	殿	○				代官手代（証文①）。「武州多摩郡関村前札野新田検地水帳」にて代官野村彦太夫代。
		高橋清口	殿	△				「武州多摩郡関村前札野新田検地水帳」にて代官野村彦太夫代の高橋甚右衛門か？
		鈴木平左衛門	殿	△				代官手代に多くの鈴木姓（証文②、証文④）。「武州多摩郡西窪村辰之御縄水帳」、「武州多摩郡吉祥寺村辰御縄水帳」、「武州多摩郡連雀村辰御縄水帳」の人物が存在し、親族の可能性あり。
		平田作右衛門	殿	○				代官手代。「武州多摩郡関村前札野新田検地水帳」にて野村彦太夫代。
関前渡ル覚								
職能	筆数	札野新田割渡帳	敬称	確認 状況	寛政譜名	寛政譜別名	御家人分限帳名	備考
	1	今村権内		×				
Ⅰ	代官・代官手代							
Ⅱ	鷹狩・鷹場管理							
Ⅲ	測量・普請							
Ⅳ	その他							

I	代官・代官手代
II	鷹狩・鷹場管理
III	測量・普請
IV	その他

含まれる①寛文9年の「請取米之事(小検見扶持米請取ニ付)」, ②延宝3年の「請取申米之事(田作小検見扶持米請取ニ付)」, ③延宝5年の「請取申米之事(田作小検見扶持米請取ニ付)」の3点と, 前年の道路普請の際に扶持米を受け取ったことの証文である④延宝6年の「覚(高井戸通道普請ニ付年貢米之内扶持方請取)」(史料番号M56)の1点である。証文①・④は, 本手形・旦那手形(代官より発給される手形)への引換えについても言及している。最終的に年貢との相殺を行うためのものと考えられる。証文②・③は, 「(此手形を以)払勘定可被相立候」と記述され, 後日米代金と年貢金とを差し引いて勘定するためのものである。このような手代の通行・滞在に要した費用が, 直

接手代から支払われるのではなく, 年貢金との相殺方式で支払われていた事例は, 近世前期の遠江国の幕領を分析した研究(佐藤1984)においても示されており, この時代に広く行われていた慣行である。証文①の差出人は, 馬場甚右衛門と千賀三右衛門, 証文②の差出人は, 馬場甚右衛門, 証文③の差出人は, 青柳武兵衛と鈴木定右衛門, 証文④の差出人は, 鈴木久右衛門と梅村兵左衛門である。以上の史料から, 分析対象としている6人のうち, 馬場甚右衛門・青柳武兵衛・千賀三左衛門・平田作右衛門の4名は, 小検見や道路普請等の現場に赴く幕府代官, 野村爲利の手代であったことを確認できる。

ところで, 幕領, 代官や代官手代については, 幕府

権力や地方行政の実態を解明する視点から、歴史学における豊富な先行研究がある（佐藤 1984, 1993; 西沢 1998）。特に手代については、その出自について、現地で採用される在地型手代（A）型と、江戸や陣屋元において代官に直属する吏僚型手代（B）型とがある。近世初期においては、戦国期以来、地域社会における優越的地位を有する人物を登用する（A）型の手代が多かった。

在地型手代について佐藤（1984, 1993）は、北遠江の中村の庄屋、中村氏が在地手代に登用された例を詳細に分析している。また、代官の過渡期の時代には、在方出身者が出身地とは別の地域で代官手代を務める形態もあり、これについては山本（2017）の研究がある。佐藤の指摘する、北遠江中村の庄屋中村氏が、「在地手代」に登用された例は、まさにこの代表例といえる。17世紀後半、代官の性格が世襲の土豪代官から全国を転動する吏僚型代官へと転換する過程において、手代の性格も変化し、在地性が失われ、（B）型の性格を強くしていく⁶⁾。それは、享保期以降にみられる、惣代庄屋などの中間支配機構の整備される動向にも繋がるものである。

なお、現時点において、馬場甚右衛門以下4名の手代の出生地や出自を示す史料は検証していない。しかし、彼らの身分的属性を考える上で注目すべきは、前述の寛文4（1664）年7月の検地帳において、馬場甚右衛門の肩書として、代官手代の下で実測を担う「竿取」と記載されている点である。少なくともこの時点において、代官手代の下で実測を担う人物であったといえる。証文①によれば、その後、寛文9（1669）年秋には千賀三右衛門と共に小検見を行っていることから、代官手代としての役目を果たす存在となっている。詳細は不明であるが、彼の実務能力が評価され、手代として任用されたとも考えられる。こうした事例は、先行研究が指摘する「在地型手代」の性格を端的に示しているといえる。また、このような経歴を有する馬場と、同等の屋敷割を受けたほかの手代達においても、何らかの実務能力が評価されて登用された在方出身の人物と考えられる。

「れんちゃく新田前」に登場した6人のうち、高橋清□と鈴木平左衛門については、本人を同定するには至らなかったものの、馬場らと同様、代官手代であっ

たと想定される。その理由は、前述の寛文12（1672）年5月の検地帳に代官手代として高橋甚右衛門、寛文4（1664）年7月の検地帳に鈴木久兵衛、証文③に鈴木定右衛門、証文④に鈴木久右衛門の名が記載されていることによる。彼らの関係性は不明であるが、親族関係にある可能性が高い。これについて山本は、1人の代官に、親族あるいは同族関係にある2人の手代が仕えていた事例を指摘しており、示唆的である（山本 2017）。

以上、「覚帳」に記載のある人名から、代官と代官に従属する立場にあると想定される人々の属性を考察した。まず「大宮前」には、代官と千町野開発の中心となった人物の屋敷地が多数確認された。このことから、「大宮前」が代官支配の中核であったものと考えられる。「大宮前」が中枢となり得た理由は、江戸と多摩地域を結ぶ伊奈道（五日市街道）がその中心部を横断しており、かつ最も江戸寄りに位置していたという地理的要因を指摘することができる。一方、「れんちゃく新田前」には、代官手代として、在方出身の実務能力を備えた人材が多数登用され、屋敷を有していたことを明らかにした。これらのことから、多数の武家地が確認できる「大宮前」と「れんちゃく新田前」の間には、同じ武家地とはいえ、その属性が明確に異なることを指摘できる。

2. 鷹狩・鷹場管理を専門とする集団

開発以前の千町野においては、鷹狩や大砲の試射などが頻繁に行われ、幕府の演習場としての役割を有していた。千町野が文献上に現れるのは、徳川家光の治世の初期である。『史料綜覧』（東京大学史料編纂所蔵）の「羅山詩集」によれば、寛永2（1625）年11月30日に鹿狩が行われ、同「寛永日記」には、寛永15（1648）年4月2日に放鷹したという記録もある。これらの記録により、徳川家光の狩場として機能していたことが分かる。徳川家光の治世の晩年になると、狩場としての利用はなくなる一方、オランダ東インド会社から持ち込まれた新式銃や、大砲の試射を行うようになった。『通航一覧』（東京大学史料編纂所蔵）には、正保3（1646）年8月に最初の大筒の試射を実施したことが記録されている。『史料稿本』（東京大学史料編纂所蔵）の「正保録」には、正保4（1647）年

8月2日に大砲の試射、同「慶安日記」には、慶安3（1650）年8月6日に臼砲の試射を行ったことが記載されている。この時の記録は、オランダ人商館長側の記録にも残されている（東京大学史料編纂所 2015）。

このような鷹狩や大砲の試射が頻繁に行われた地域においては、「鳥見⁷⁾」と呼ばれる職名の人物達が、鷹狩の差配や鷹場の管理などを行っていた。「覚帳」の記録によれば、遠山景光、佐山房野、宿谷尹宅、飯田正吉、4名の人物の名前を見出すことができる。

この4名のうち、遠山景光の名前は、「覚帳」における、代官上下を除いたすべての武家の筆頭に記載されている。遠山景光本人は、表立った功績を残していないが、彼の近親者達は、千町野開発に深く関わっていたことが分かっている（夏目 2019）。

父の遠山景重は、徳川家光の御代に鷹狩に関係する役を長年務めていた。『史料稿本』（東京大学史料編纂所蔵）の「視聴日録」によれば、慶安3（1650）年8月6日には臼砲の試射の参加者に遠山景重（十右衛門）の名前を確認することができ、遠山家が景重の時代から千町野に関わりを有する家柄であったことが分かる。さらに遠山景光は、万治2（1659）年における江戸住民の千町野移住計画を主導した人物の1人と考えられる。普請奉行、永井直元の子を最初の妻とした後、寛文10（1670）年の千町野開発を主導した、前述の勘定奉行妻木重直の子を2人目の妻としている。開発に関する遠山景光自身の活動は全く不明ながら、多くの近親者達が千町野開発に深く関わっており、遠山景光が「覚帳」の筆頭に名を連ねている理由を窺い知ることができる。

一方、佐山房野、宿谷尹宅、飯田正吉の3名は、本人達の来歴こそ、鳥見役として記録が残っているものの、共通する点は、家系の出自がいずれも不明なことである。文化11（1814）年に小田原藩士の山形彦左衛門豊寛が幕府の各役職の職掌や沿革を記した書に『明良帯録』（国立公文書館蔵）がある。『明良帯録』によれば近世後期において鳥見役は、各地に散らばった幕領を支配する代官になるための昇進コースの一つであったとされる。近世前期の段階にこのような昇進コースが存在したか否かは不明であるが、実際に前述の代官野村爲利の祖父爲勝は、元和6（1620）年に鳥見同心を預けられており、その後、爲利の父の爲重の

代になって以降、3代にわたって代官を務めている。

いずれにせよ、近世初期の鳥見役は、鷹場の管理を表面上の役目としながら、地方の探索を職としており、地域支配にあたっては、先鋒となって現地の民情をとらえる役目を担っていたことが知られている（村上 1965）。つまり、佐山房野、宿谷尹宅、飯田正吉の3名は、新たな土地開発に先立って現地入りする役割を有し、こうした能力を評価されて新たに取り立てられた人物であると推測できる。

3. 測量・普請を専門とする集団

「覚帳」に記録された武家のうち、測量・普請役として記録されている人物は、妻木重直、山田直國、平野勝長、能勢頼次、松浦信貞、斉藤利安、朝比奈眞辰、金丸重正、吉田重弘の9名である。

この集団に関して、特に注目すべき点は、寛文9（1669）年に幕府が実施した新墾地巡見に、妻木重直、平野勝長、松浦貞信、金丸重正の4名が参加していることである。この新墾地巡見においては、武蔵野、笠懸野（現・群馬県）、樺海（現・千葉県）を巡り、新たに開発を行う地を定めている。

当時の巡見の様子を窺い知る史料として、妻木重直の差出人による寛文9（1669）年の手紙「妻木重直書状」（武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館蔵）が現存している。この手紙の内容は、武蔵野が意外と広く検分にもう少し時間がかかること、千町野（札野）の開発は、江戸表の決定であり、自分は預かり知らぬこと、詳細は百姓（井口）八郎右衛門に任せていることが書かれている。この手紙の宛先が分かれば重要な情報となり得るが、残念ながら用紙が劣化しており、人物を特定できない⁸⁾。

その他、向山源大夫によって編纂された『蠹餘一得』（国立公文書館蔵）には、寛文10（1670）年に彼らが武蔵野を巡見した際の手紙の写しが残されている。この手紙の内容は、武蔵野の検分が終了したこと、計測した武蔵野の広さに関すること、開発にあたっての権利関係の調整に関することなどを記載している。千町野に関しては、百姓（井口）八郎右衛門が開発を進めているが、この土地は、玉川次左衛門が所望した場所と同じであることが書かれている。差出人は連名で、金丸又三郎重正（「大宮前」に屋敷所持）、設

楽小左衛門、平野次郎左衛門（「大宮前」に屋敷所持）、伊奈五郎兵衛、妻木彦右衛門（「大宮前」に屋敷所持）である。宛先は、岡田豊前守、松浦猪右衛門（「大宮前」に屋敷所持）、杉浦内藏允となっている。つまり、寛文9（1669）年の新墾地巡見に関わった「覚帳」に名前のある4名のうち、寛文10（1670）年の巡見においては、金丸、平野、妻木は、現地調査に赴き、松浦はその報告を受ける立場にあることが分かり、彼らが職務上、常時緊密な関係にあったことが分かる。また、武蔵野以外の記録としては、椿海において、寛文9（1669）年の段階で妻木重直が川筋付替えに関する具体的指示を出したことが寛文10（1670）年の書状「椿新田干拓難儀に付井戸野 仁王村訴状」に記録されている（海上町史編さん委員会 1982）。以上の史料から、寛文9（1669）年新墾地巡見の参加者は、開発許可のための形式的な伝達係ではなく、開発計画策定の実務者であったことを読み取ることができる。

そのほかの5名に関しても、『寛政譜』によれば、山田直國は、寛文9（1669）年に上野、信濃、越後を巡見、能勢頼次は、寛文6（1666）年に常陸国谷原にて新田開発、斉藤利安は、天龍川堤の普請、朝比奈眞辰は、万治2（1659）年より石奉行を務め、吉田重弘は、数多く城普請を実施した叔父の重治を養父とするなど、いずれも測量や普請などの土木関連技術を有する人物である。

このように9名の武家達は、いずれも測量・普請などを専門とする幕府の技術官僚といえるが、なぜこの時期、すなわち寛文10年（1670年）に千町野に集められたのかについて述べる。

この時期、文禄・慶長以来の全国的大開発の影響によって、全国各地で土砂災害が頻発するようになっていた。そのため、熊沢蕃山や山鹿素行などの著名な思想家は、無尽蔵に増える新田開発の結果として、本田畑が荒廃している状態にあることを警告している（宮崎 1990）。

こうした状況は、幕閣の中核においても認識されており、寛文6年（1666年）2月2日「諸国山川掟」が發布され、むやみな森林伐採や、新田開発が戒められることになった。通説では、この「諸国山川掟」の發布を境に、幕府の農政思想が“開発万能主義的農政”

から“園地的精農主義農政”へと転換し、本田畑中心主義になっていく（大石 1977）。

しかしながら新田開発は、「諸国山川掟」以後も継続する。幕府は、「諸国山川掟」というガイドラインに沿うようなかたちで土砂被害の最小化を図りながら、新田開発を継続する必要に迫られていたのである。そのための計画設計や技術改善を試す地域として、千町野の新墾地が選ばれ、経験豊富な技術官僚が集められたと推論する。

4. その他

櫻井信義、余語堅壽、久保正信の3名は、これまでに述べた集団に含まれていない人物である。ただし、櫻井信義の息子義明は、前述の斉藤利安の女子を妻としており、縁戚関係が存在している。余語堅壽は、小兒の醫であった父常壽を継ぎ、寛文12（1672）年に番醫となる医師の家系である。久保正信は、父正元と同様に、諸家領地と寺社領地の御朱印書記を務めており、書記の家系である。

IV おわりに

本研究においては、寛文10年（1670年）の「覚帳」に記載された武家達の来歴から、千町野開発の性質を検討した。

千町野開発に伴って移住してきた武家達のうち、来歴の明らかになった21名には、三河以来の譜代の人物は見当たらない。また、武田旧臣や北条旧臣所縁の家系に占められてもいない。彼らの間において血縁・姻戚関係などの繋がりは僅少であり、当該地域の正式な支配者である代官と代官手代の集団、鷹狩・鷹場管理を専門とする集団、測量・普請を専門とする集団の集合した職能集団であった。彼らが幕府の新田開発に関わる技術官僚として、従来の研究にいわれるような理想的村落の建設を企図していたか否かは不明である。しかし、千町野という新墾地の役割について、「諸国山川掟」というガイドラインに沿うための計画設計や、技術改善の結果を試す地域としての位置付けをしていた可能性は高い。

一方、筆頭に名前のある遠山景光の遠山家は、父の遠山景重が牟礼野臼砲試射に参加して以来、普請奉行

として江戸住人の移住を主導した永井直元や、武蔵野開発を主導した妻木重直の両名と姻戚関係を有しており、遠山家は一貫して千町野開発に関わっていたことになる。

このように旧主家・血縁・姻戚関係が希薄な技術官僚的集団の中にあっても、意思決定の主導的立場に立つ人物は、旧主家・血縁・姻戚関係などと密接な繋がりを有している構図も明らかとなった。

謝 辞

本研究の実施にあたっては、武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館米崎清実学芸員、埼玉県立文書館（元・杉並区立郷土博物館）駒見敬祐学芸員、ならびに慶應義塾大学文学部古文書室重田麻紀研究員の各位から多大なるご助言、ご助力を頂いた。記して謝意を表する。また、本研究における史料収集調査は、2019～21年度JSPS科研費JP19J10769「地理情報科学的接近による近世武蔵野の地誌学研究」特別研究員奨励費（研究代表者：夏目宗幸）の成果の一部である。

注

- 1) 当該地域名に関しては、札野、牟禮野、松野、御札茅場千町野と、文書によって呼称にばらつきがあり、それぞれの範囲も厳密に一致しない。本研究においては、おおよそ現在の武蔵野市・三鷹市・杉並区の一部を含む同一地域とする。地名表記は、統一して千町野と表記する。また、千町野内の村名は『元禄郷帳』に依拠して表記する。ただし、西窪新田は「村」と表記されているため、ほかと統一して西窪新田と改める。また、必要に応じて括弧内に文書史料における呼称を補足する。
- 2) 関前村（元の関前新田）の名主を務めていた家系の文書群である。千町野開発当初の様子を伝える貴重な史料を多く含んでいる（武蔵野市 1991）。
- 3) 寛文10（1670）年の「覚帳」は、武蔵野市（1991）など、いくつかの出版物に収録されている。しかし、それぞれ書き下しが異なっていたり、一部の内容が省略されている。そこで本研究では、武蔵野市立ふるさと歴史館にて原史料の内容を確認し、それに基づいて検討を行った。

- 4) 「近世、間竿をもって土地丈量に従事した者。早い例として文禄3（1594）年「就伊勢国御検地相定条々」に「さほ打のもの」とある。江戸幕府は竿取に慶安2（1649）年依怙鼯屑なく正確に丈量するよう命じている。間竿の使い方が『地方落穂集』などに記されているのも、より正確を期すためであろう。『勸農固本録』に竿取は「年廿より卅迄、達者成律義者」がよいと記す。重労働で困難な竿取の条件をよく表現している」（青野 1985: 239）。
- 5) 江戸時代、幕領で代官が検見をする前に、代官の手代が2人1組で手分けして予備の検見をすること。そのうち、1名は地方功者（農政に精通した者）を入れ、立毛の善悪、村柄の様子などを巨細に糺（ただ）すことが任務であった（佐藤 1985）。
- 6) ただし、山本（2017）は、（A）型と（B）型は共に在地の有力者層から登用される点は共通しており、勤務場所の相違のみが（A）型と（B）型の分類の背景にあることを指摘している。
- 7) 「江戸時代鷹場の管理・獲物の鳥類の状況を視察・報告するを^{（ママ）}任務とした役人。近世初期までは、鷹狩に先立って、その時季時季^{（ママ）}に飛来する鳥の代（しろ）についての状況を偵察し、鷹を遣う主君に報告する臨時の役で、鶴見せに、雁見に遣わすなどと表現されている」（加藤 1989: 480）。
- 8) 本稿の査読・校正段階において、この宛先に関する調査結果が公表された（米崎 2020）。赤外線フィルムを用いた撮影によって可視化された墨の痕跡から、宛先は遠山忠三郎である可能性を指摘している。

文 献

- 青野春水 1985. 竿取. 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典 第6巻』239. 吉川弘文館.
- 和泉清司 2011. 『徳川幕府領の形成と展開』同成社.
- 内田寛一 1934. 武蔵野の計画的開拓の一例 上 武蔵野町西窪について. 大塚地理学会論文集 3: 81-96.
- 内田寛一 1935. 武蔵野の計画的開拓の一例 下 武蔵野町西窪について. 大塚地理学会論文集 5: 225-256.

- 内田寛一 1971.『近世農村の人口地理的研究』帝国書院.
- 海上町史編さん委員会 1982.『海上町史 特殊史料編 (樫新田関係史料)』海上町.
- 大石慎三郎 1968.『近世村落の構造と家制度』御茶の水書房.
- 大石慎三郎 1977.『江戸時代』中央公論社.
- 大石 学 1992. 渡辺家文書について. 渡辺家文書研究会・新宿歴史博物館編『武蔵国豊島郡角筈村名主 渡辺家文書 第一巻』5-25. 新宿区教育委員会.
- 加藤秀幸 1989. 鳥見. 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第10巻』480. 吉川弘文館.
- 菊地利夫 1957. 武蔵野台地における前期的畑作新田村の建設とその経済的基礎. 新地理 5(3): 1-19.
- 菊地利夫 1958.『新田開発 下巻』古今書院.
- 菊地利夫 1977.『新田開発 改訂増補』古今書院.
- 菊地利夫 1986.『続・新田開発／事例編』古今書院.
- 喜多村俊夫 1981.『新田村落の史的展開と土地問題』岩波書店.
- 木村 礎 1964.『近世の新田村』吉川弘文館.
- 木村 礎・伊藤好一 1960.『新田村落——武蔵野とその周辺』文雅堂銀行研究社.
- 佐藤孝之 1984. 近世前期の広域村落支配と「領」. 国史学 122: 40-79.
- 佐藤孝之 1993.『近世前期の幕領支配と村落』巖南堂書店.
- 佐藤常雄 1985. 検見取法. 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典 第5巻』224-225. 吉川弘文館.
- 杉並区教育委員会 1975.『井口家の長屋門 (杉並区宮前)』杉並区教育委員会.
- 高橋源一郎 1929.『武蔵野歴史地理 第二冊 東京西郊, 東京西南郊』武蔵野歴史地理学会.
- 東京大学史料編纂所 2015.『日本関係海外史料 オランダ商館長日記 譯文編之十二』東京大学.
- 東京都杉並区役所 1982.『新修 杉並区史 中』東京都杉並区役所.
- 夏目宗幸 2019. 遠山景光と千町野開発. 武蔵野ふるさと歴史館だより 4: 2-4.
- 夏目宗幸 2020. 武州多摩郡吉祥寺村の地割復原——寛文4年検地帳に基づく機械的作図の結果と考察. GIS-理論と応用 28 1: 49-60.
- 西沢淳男 1998.『幕領陣屋と代官支配』岩田書院.
- 福田 徹 1986.『近世新田とその源流』古今書院.
- 宮崎道生 1990.『熊沢蕃山の研究』思文閣出版.
- 武蔵野市 1991.『武蔵野市史 続資料編6 井口家文書3』武蔵野市.
- 武蔵野市史編纂委員会 1965.『武蔵野市史』武蔵野市役所.
- 村上 直 1965.『天領』人物往来社.
- 山本英二 2017. 元禄期幕府直轄領支配と代官手代. 東四柳史明編『地域社会の文化と史料』同成社.
- 米崎清実 2020. 井口家文書の妻木彦右衛門書状. 武蔵野ふるさと歴史館だより 5: 2-3.
- Komeie, T. 2010. The early modern rural landscape. In *A landscape history of Japan*, ed. A. Kinda, 137-161. Kyoto: Kyoto University Press.

〈著者略歴〉

夏目 宗幸 (なつめ むねゆき)

1988年 東京都武蔵野市生まれ. University of Washington 卒業後, 京都大学大学院地球環境学舎修士課程修了, ESRI ジャパン株式会社社員を経て, 現在 京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程, 日本学術振興会特別研究員, 武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館特別研修員. 江戸近郊農村の開発史を専門とする.

安岡 達仁 (やすおか みちひと)

1996年 高知県南国市生まれ. 京都大学文学部卒業後, 現在 京都大学大学院文学研究科修士課程. 専門は日本近世史, 特に近世前期の政治史. 現在は寛文期前後の時代の幕藩関係や武家社会を, 大名家に残された史料をもとに研究している. 景観復原など歴史地理学的手法への関心も強い.